

ノンマルトの伝言ー
『ウルトラセブン』二次
創作<第42話「ノン
マルトの使者」後日談
>ー

童神

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

かつてM78星雲より遣わされ、地球の平和のために戦ったウルトラセブンは、当時と同じ「地球人」モロボシ・ダンの姿を借り、半世紀ぶりに地球を訪れた。その目的は、戦いで失った部下の慰霊と、かねてより胸の奥にくすぶっていた謎を解き明かすためであった。

墓参りの後、ダンは「ノンマルト」を名乗る青年より声を掛けられる。深まる謎、さらに戦友との再会。そして再び現れる怪獣……

目次

ノンマルトの伝言〈前編〉	1
ノンマルトの伝言〈後編〉	28

ノンマルトの伝言〈前編〉

1. 我が名は「ノンマルト」

秋風が、辺りを包むように吹いていた。

ここは東京都郊外にある、某霊園である。立ち並ぶ各家の墓を、夕日が照らす。周囲には、みっしりとススキが生えていた。それがなだらかに揺れる。

「これで最後だな」

モロボシ・ダンは、足元のバケツから柄杓で水を掬い、眼前の墓を洗う。そして携えていた紙袋から、一凜の白い花を取り出し、線香とともに備える。

「白土君。君も若くして、実に優秀かつ勇敢なM A Cの隊員だった。安らかに眠りたまえ」

在りし日の部下の姿を思い浮かべながら、ダンは合掌した。

「ああ、もう四十年近くが経つのか」

胸の内につぶやく。かつて彼の率いた宇宙パトロールの精鋭部隊・M A Cは、四十余年前のこの日、円盤生物・シルバークルーメの襲撃に遭う。当時隊長だったダン、そし

ておおとりゲンの二人を除く、ほぼ全員が殉職したのだった。

しかし……：我ながら、ほんとうに情けないものだ。地球を守るのが己の使命と心得ながら、一番身近にいる部下の命さえ助けられなかったのだから。

小さくかぶりを振り、ダンはさつと荷物をまとめた。

いつまでも感慨に耽っている暇はない。今回の「訪問」の目的は、部下達の墓参りのほかにもあるのだ。右手に紙袋を掲げ、踵を返して歩き出す。

霊園を出ると、そこには小さな交差点があつた。

横断歩道の手前に立ち、歩行者用信号機が青に変わるのを待つ。傍らのカーブミラーに、ダン自身の姿が映る。

黒のジャケットに青のポロシャツを着込んだ、初老の男性の出で立ちだ。彼の種族と地球人の時間感覚はまるで違うのだが、どうやらこの星の時間に合わせて、変身する際の外見も歳を重ねるようになっていっているらしい。

その時だった。

「……むっ、誰だ！」

前方へ、ダンは叫んでいた。

横断歩道の反対側。夏場でもないというのに、陽炎が立ち込める。そこにぼんやりと、人の姿が浮かび上がる。

ブルゾンにジーンズ姿の青年が、こちらに微笑の眼差しを向けている。細身の端正な顔立ちだ。それでも一目見て、明らかに異様な雰囲気だと分かる。

——フフフ。さすが銀河系の守護神として、名を馳せたお人だ。一目見て、私が人間でないと感じていたようですね。

テレパシーだ。青年の声が、脳内に直接流れ込んでくる。

「き、君は何者なんだっ」

こちらは肉声で応じた。

「どうして僕の正体を知ってるー」

すでに歩行者用信号は青となり、間もなく点滅を始めた。それでも両者は動かない。

——失礼、自己紹介が遅れました。モロボシ・ダン……いや、ウルトラセブン！

あくまでも微笑を湛えた目で、青年はやや語気を強める。そして短く告げた。

——我が名は……もとい、我が種族の名は……ノンマルト。

「の、ノンマルトだっ？」

つい声が上がずる。顔色が変わるのが、自分でも分かった。

——おやおや、さすがに動揺しているようですね。

忌々しいほど、相手は涼しげに言い放つ。

——まあ無理ありません。誰よりも地球を愛するあなたにとって、ノンマルトの名

は、少々都合の悪いフレーズでしょうから。

「なにいつ。それは、どういう意味だ」

——誤魔化すことはありません。正直、お認めになりたくないのでしょ？
くくつと肩を揺らし、さらに畳み掛けてくる。

——ご自身が命を懸けて守り抜いた地球人が、実は「侵略者」だったなんて。

ダンは東の間、口をつぐんだ。

耳が痛いどころか、急所を刺すような青年の発言である。今回の地球訪問におけるもう一つの目的は、まさにその真偽を確かめるためなのだ。

ノンマルトとは、ダンの出身であるM78星雲の言葉で「地球」を指す。

かつてウルトラ警備隊という地球防衛の精鋭部隊に所属していた頃、ノンマルトを名乗る海底の住人が、ガイロスという怪獣を差し向け、地上の破壊を企てた事件があった。地球の平和を守るため、ダンは当然これを阻止する。

ところが一説によれば、このノンマルトこそ地球の先住民らしい。

もし説が正しいければ、眼前の青年が言うように、今の地球人は「侵略者」、少なくともその子孫ということになる。そしてダンも、その片棒を担いだのだ。

「……それで」

どうか平静を装い、ダンは尋ね返す。

「君は僕に、何を伝えに来たのかね」

青年は僅かにうなずき、端的に答えた。

——これから我々のすることに、干渉しないで欲しいのです。

「す、することつて……まさか」

思わず怒鳴り返す。

「君達の祖先の仕返しに、地球を侵略し返すと言うのかね。ばかなつ！ そんなことをすれば、罪のない大勢の人達が死ぬんだぞ」

——フフ。かつて我々も、同じ仕打ちを受けました。なのにそっちは許されて、我々には今の地球人を殺すなどおっしやる。これはまた、随分とムシの良い話ですね。

ダンが「しかしだな」と言い掛けるのを、青年は右手を掲げて制す。

——ご心配なく。我々はなにも、今すぐ地球人を滅ぼすと言っているわけではありません。ただ……少しばかり、目を瞑っていて欲しいのです。我々の先人が、あなた方に邪魔されて実現できなかつた、海底都市建設をね。

「ほう、海底都市……ねえ」

わざとらしく吐息をつく。

「そんなこと言つて、地上を攻撃するための前線基地を作るつもりじゃないのか」

——ええ。もちろん自衛のため、多少の武装はさせてもらいますよ。なにせ一度、破

壊されてしまいましたから。あなたのいたウルトラ警備隊に。

ダンは、ぐつと声を詰まらせる。青年はニヤリと笑った。

——それと……さつきから申し上げていますように、今すぐ地上破壊を企てるつもりはないのです。というより、その必要もないでしょう。

「ど、どういふことだね？」

——我々が直接手を下さなくとも、地球人は自ら滅びの道へ進んでいるからです。あなたもよくご存じでしょう。数多の戦争、核開発、環境破壊。

無言のまま、相手の話を聞く。確かに大きく外してはいない。

——こちらの見立てだと、あと数百年がイイトコでしょうね。彼らが衰退したその時こそ、我々は大手を振って、この星を取り返せるというわけです。

ふと交差点の西側より、大型トラックが走ってきた。ほどなくその影に、相手が隠れてしまう。

——今日のところは、この辺で。良いお返事待っています。

「なにっ……ま、待て！」

トラックが走り去った後。青年の姿は、影もなく消えていた。

2. 説の矛盾

翌日。ダンは、東京大学図書館にいた。

大机のイスに腰掛け、手元には数冊の分厚い書籍を積む。そのうちの一つを広げ、手早く目を通していく。背表紙には『生命誕生の起源』と記されている。

「……うむ、これも違うな」

本を閉じ、他のものに重ねる。

考えてみれば当然だろう。国の英知を結集した場所とはいえ、実は地球に先住民がいたなんて機密情報、こうして人目に触れる場所に置いておくはずないからな。

しばし目を押さえた。そして老眼鏡を外し、小さくかぶりを振る。

やはり地球防衛軍・日本支部のデータベースにアクセスするほかないか。しかしM A C時代のパワードは、もう使えないだろう。かつての仲間を当たれば、何か教えてくれるかもしれないが、この件で迷惑をかけたくない。かといって、まだウルトラの超能力を使う段階でもない。さて、どうしたものか。

その時ふと、革靴の足音が聴こえた。やがて段々と近付いてくる。

ダンは一瞬「昨日の青年か」と身構えたが、すぐに違うと気付く。やって来たのは、銀髪の紳士だった。しかも古くから馴染みの顔である。

「ほう。これはまた、珍しい場所でお会いしましたね」

「う、ウルトラ……いや」

紳士は青のジャケツツ姿。そして左胸に、流星マークのバッジを付けている。

「ハヤタさん」

相手は穏やかに微笑んだ。彼こそ元科学特捜隊隊員にして、かつてウルトラマンと一心同体となり地球の平和のために戦った、ハヤタ・シンその人である。

「なるほど。今は『どつちのハヤタ』なのか、迷われたんですね」

「え……まあ、ちよつと」

ダンは苦笑いした。

多くのM78星雲のウルトラ人は、地球で活動する際、仮の人間の姿に変身することが多い。だから地球上では、互いに人間の姿での名前を呼び合う。

ところがウルトラマンは、ハヤタという実在する地球人に、言わば憑依している状態だ。二人が一心同体の時もあれば、分離している時もある。

さらに複雑なのは、二人が分離している際、ウルトラマン単独で「ハヤタに変身」するというケースもあるのだ。この場合、ハヤタは二人存在することになる。

このようにウルトラマンとハヤタの関係は、少々ややこしい。モロボシ・ダンが戸惑うのも、無理はなかった。

「答えを言いましよう」

フフと笑い、ハヤタは隣の席に腰掛ける。

「昨夜から、彼も一緒です」

その返答に、ダンは「えっ」と声を発した。

「ウルトラセブン……いやモロボシさんが気づかなかったのも、無理はありません」

こちらの戸惑いを発したように、ハヤタはさらに続ける。

「彼は今、あえて意識を眠らせておくと言っていました。ですからモロボシさんにも、気配を感じられなかったはずですよ」

「ええ、そうでした」

「私にはよく分からないが……あなた方の種族であれば、そういう術はお手の物なのでしょう?」

「え、まあ。それは」

ダンはふと、疑問に思う。

「しかし……彼はなぜ、そんなややこしいことを?」

「二つは……盗み聞きは良くないと、思ったのでしょうかね。ハハハ。彼もすっかり、地球人の文化に馴染んでいるようだ」

ハヤタは陽気に答え、さらに話を続けた。

「そしてもう一つは、彼が言うには……今回はウルトラマンの存在を抜きにして、あくま

でも「地球人のハヤタ」"として、モロボシさんの話を聞いて欲しいと」
「な、何ですって」

ダンはまだ驚いてしまう。

「それじゃ、彼は……僕が地球に来た目的を、知っていたと？」

「ええ。もつとも何の目的かまでは、彼は話さなかつたですが。これは直接、モロボシさんの口から聞けということなのでしょう」

「なるほど、しかし……ちよつと妙ですな」

だいが理解できてきたが、まだ納得のいかないことがある。

「ただ話を聞いて欲しいだけなら、彼がわざわざハヤタさんと一心同体になる必要は、別にないように思えるのですが」

「……そこなんです」

ハヤタはふいに、表情を曇らせた。

「なんでも、状況が変わる可能性があるのだとか」

「え……それは、どういう」

声を潜め、相手は短く告げた。

「不審な者が、地球へ向かったという情報をキャッチしたそうです」

「なんですって！」

思わず声を上げてしまう。周囲の学生らしき若者が、数人訝しげな目を向けた。ダン
は一つ咳払いして、尋ね返す。

「ふ、不審な者ですと?」

すぐさま昨日の青年を思い浮かべるが、すぐに打ち消される。あの種族は地球の原住
民なのだから、宇宙からの侵入者には当たらない。

「ええ。もつとも……モロボシさんの事情と関係あるのかどうかは、分からないと彼は
言っていました。ですから現時点では、こちらに干渉するのは控えると。ただし、いつ
ソイツが暴れ出すとも限りませんから。ほら、ちゃんと忍ばせています」

ジャケットの内側を、ハヤタは少しめくった。そこに変身アイテムであるベータカプ
セルの頭がのぞく。

「……さて。私の話は、以上です」

地球の友は、そう言って立ち上がる。

「モロボシさん。今度は、あなたの話を聞かせてもらいましょう」

図書館を出て、二人はキャンパス内を歩き出した。構内はすっかり秋だ。足元に、鮮
やかな紅葉が幾度も舞う。

「何度見てもきれいですなあ、日本の紅葉は」

「え……アハハハ」

ダンの感想に、ハヤタが吹き出す。

「な、なにがおかしいんです？」

「これは失礼。いえね……違う星から来たあなたが、この美しさが理解できるのかと、感心したのですよ。もはやあなたは、地球人以上に地球人だ」

「そりや当然です」

きつぱりと、ダンは答える。

「地球の美しさ、そこに生きる人々の素晴らしさに魅せられたからこそ、僕達はこの星を第二の故郷として守っていくことを決意したのですよ」

「ハハ……その美しい星を、戦争やら環境汚染やらで粗末に扱っている我々としては、じつに耳の痛い話だ」

「何をおっしゃる。ハヤタさんは、立派な地球人だ。彼……ウルトラマンも、よく話してくれましたよ。ハヤタ君と共に戦えた日々を、今でも誇りに思っていると」

道中、数人の男子学生とすれ違う。

「ハヤタ先生、こんにちは！」

彼らは直立不動になり、深く一礼してから去っていく。その度に、ハヤタは「ああこんにちは」と照れた顔になる。

「せ、先生？」

「いやあ……防衛軍長官を務める傍ら、各大学を回って講演活動をしているのですよ。毎年やっているものだから、すっかり顔を覚えられてしまつて」

「それだけじゃないでしょう」

ダンは、少しおどけて言つた。

「ハヤタ隊員といえ、かつて地球防衛の最前線で戦つたヒーローです。防衛軍関係者じゃなく、一般庶民にも広く親しまれた存在だということ、さすがに分かりますよ」

「……まあこの話は、もういいじゃありませんか。そんなことより」

ハヤタはそう言つて、さりげなく話を逸らす。自分の手柄を披歴するのは好きじゃないらしい。なるほど彼が認めるわけだ……と、ダンは胸の内につぶやいた。

「そろそろモロボシさんの話を聞かせて下さいよ。今回、地球にいらした理由……M A C 殉職者の墓参りの他にも、何かおありなのではないでしょうか？」

一つ吐息をつき、ダンは返答する。

「実は……ノンマルト事件の真相を、たしかめに来たのですよ」

ハヤタは「ああ、例の」とすぐにながらうなずいた。

「もう六十年近くになりますか。ノンマルトを名乗る海底人が、ガイロスという怪獣をあやつり、地上破壊を仕掛けてきた」

「ほう、覚えておられるのですか」

「もちろんですとも。当時……私は地球防衛軍再編に伴い、科特隊時代のムラマツキャップと共に、隊員養成機関の教官を務めていましたが、話はよく、漏れ伝わってききましたよ」

そう言うのと、ハヤタは苦笑いを浮かべる。

「モロボシさんには言いづらいが……当時のキリヤマ隊長の判断に、問題があったと指摘されたのでしたよね。怪獣を撃退したはいいが、その後海底都市まで破壊したのは、やりすぎだったんじゃないかと」

「ははっ、よくご存知だ。やりすぎどころか……あれは虐殺行為だと、防衛軍内部にまで隊長を非難する者がいたほどです」

歩きながら溜息をつき、相手の目を見上げる。

「ハヤタさんも、そう思われますか?」

率直に尋ねると、ハヤタは「どうでしょう」と渋い顔になる。

「先に攻撃してきたのは、そもそも向こうですからね。せめて海底基地なのか、それともただの都市なのかハッキリすれば良かったが……相手に見せてくれと頼むわけにもいかないでしょう。キリヤマ隊長は、難しい判断だったと思います」

そう言うって、また微笑む。

「昔、同僚のアラシ君が言ってましたよ。怪獣とは『人間社会に入れてもらえない、悲しい存在なんだ』と。地球防衛という任務を果たす以上、クレイゴトでは済まされない部分もありますからね」

「ええ。ですが、ハヤタさん」

やや声を潜めて、ダンは話を続けた。

「地球人のあなたに、こんなことを言うのは忍びないが……実はですね。そのノンマルトこそ、地球の先住民だったという説があるのです」

「ああ。その説なら、私も聞いたことがありますよ」

事もなげに、ハヤタは言った。

「あなた方の星では、地球のことを『ノンマルト』と呼ぶのだそうですね。いつだったか、彼に教えてもらいました。そして……説が本当だとしたら、実は地球人こそ侵略者。我々は、その子孫なのだと」

「ええ、あくまでも説の一つに過ぎませんが。不愉快な話で申し訳ない」
「いやいや……そんなことは、ありませんよ」

溜息混じりに言うと、相手はふいに悲しげな笑みを浮かべた。

「モロボシさん。さつきも言ったように、人間にはそういう愚かな一面もあるのですよ。今も世界各地で、醜い戦争や環境破壊は続いている」

ダンが「そんなことは」と言いかけるのを、ハヤタは笑って制す。

「ありがとう。ですがね、モロボシさん。地球人の性質からすれば……そういう過去があつたとしても、私はちつとも驚きませんよ」

そう言つて、すぐに「事実ならね」と付け足す。

「じ、事実なら……ですか」

「ええ」

どこか達観した口調で、ハヤタは言った。

「話としては面白い。しかしこの説には、大きな矛盾がある」

「と言いますと?」

「あなた方の星には及ばないかもしれないが、我々もそれなりに科学は進歩してきましてね。人類がどのように発達してきたのか、ある程度分かつてきているのですよ」

「な、なるほど」

「モロボシさんも知っているでしょうが、人間はサル……正確にはちよつと違う系統らしいが、大昔はサルと同じナリをして、木の上で暮らしていたのですよ。そういうレベルの者達が、他の種族を壊滅させるなんて芸当、できるはずないでしょう」

ダンは、つい「ハハ」と笑い声を発した。

「たしかに常識で考えれば、ありえない話です」

「そうでしょう。もつとも別の説によれば……今の人類誕生よりも遙か以前に、高度な文明が存在したなんて話もありますか」

「ああ、古代ミュー帝国のことですか」

よくご存知ですね、とハヤタは微笑む。

「ひよつとして彼らとノンマルトとの間に、なにかイザゴザがあつたということは考えられます。しかしそうだとしても、ミュー帝国はすでに滅びてしまっていますから、我々とのつながりはありません」

「なるほど。彼らとの問題を、今の人類に言われても困るというわけですね」

「む、しかし……なんだか不思議ですねえ」

相手はふと、訝しげな目になる。

「と、おっしゃいますと?」

「モロボシさん。あなたのことです」

おどけるように、ハヤタは言った。

「ウルトラの科学は、地球人よりも遙かに進んでいるはずですよ。今、私が述べたような見解は、あなたの方の力をもつてすれば、とつくにお見通しのはずですよ」

「ええ。言われてみれば、そうなのですが」

苦笑いして、ダンは答えた。

「僕の前に現れたノンマルト……あの時は、真市という少年の姿を借りていましたが。彼の言葉に、何となく真実味があったのです。嘘を付いているとは思えなかったので」

その子孫と思しき青年とも出会ったことは、現時点では伏せておく。

「もちろん……今ハヤタさんが言われたように、何か大きな誤解があって、ということも考えられるのですが」

「ふむ、そういうことですか」

東の間、ハヤタはうつむき加減になった。

「どうかなさったのですか？」

「モロボシさん」

やがて顔を上げ、相手は表情を引き締める。

「これはもう少し、探ってみる必要があると思います。ひよつとして……まだ我々の知らない真実が、埋もれたままになっているかもしれない」

似ているな、と胸の内につぶやく。ハヤタの冷静に物事を見極め、最善の行動を心掛けようとする態度は、ダンと同じ種族である彼の姿と重なる。

「ええ、その方が賢明……おやつ」

その時だった。ふいにハヤタの左胸の流星バッジが、音を鳴らし光る。

「ちよつと失礼」

アンテナを伸ばし、ハヤタは応答する。このバッジは緊急通信に用いられていた。「こちらハヤタ。どうしました？」

——大変です！ 東京湾沖に、黒色のタコと類似した怪獣出現。一隻のタンカーを沈めた後、沿岸へ向かっています。このままだと、湾の近辺が……

傍らのダンにも、音声が漏れ伝わってくる。

「落ち着きなさい。それで現在の状況は？」

ハヤタが冷静に問い返した。

——先ほど防衛軍へ出動を要請。すでに航空機部隊による迎撃が始まっています。しかし怪獣の表皮は硬く、ミサイルでは歯が立たないもようです。

「了解。直ちに帰還する」

通信が切れると、相手はこちらに顔を向ける。

「モロボシさん。その顔は……どうやら怪獣の素性が、分かるようですね」
ええ、とダンはうなずく。

「ノンマルト事件の際に出現した、蛸怪獣ガイロスに間違いありません」

すでにウルトラの超能力を解放し、海上の映像を確認していた。オイルを積んだタンカーが真つ二つに折れ、炎上している。そして重油の漏れた海を掻き分けるように、怪獣ガイロスがゆつくりと、しかし確実に東京湾へと近付きつつあった。

おかしいな……と、ひそかにつぶやく。

昨日の青年によれば、ノンマルトは今すぐ攻撃を掛ける意思はないとのことだった。あれはこちらに手を出させないための、ブラフか。それとも何らかの事情で、方針を変えることにしたのか。

「どうかなさったのですか?」

怪訝そうに、ハヤタが問うてくる。

「あ、いや……とにかく」

ダンは決然と言い放つ。

「どんな理由があっても、この地球上で暴力を振るうことは許されない」

そしてウルトラ・アイを取り出し、ハヤタに「行つてきます」と告げる。

「……なら、私も」

ハヤタが懐に手を入れるのを、ダンは「あなたはけっこう」と制した。

「彼の力を借りるまでもありません。あの怪獣、力量は大したことありませんから。それより……ハヤタさん。あなたには、もう少し背後を探っていて欲しい」

「うむ、その方が良さそうですね」

さほど間を置かず、相手はうなずく。

「助かります。では……」

ダンはずを返し、目元にウルトラ・アイを装着した。すぐに彼の双眼が発光する。
——デュワツ!!

東京湾沖。地球防衛軍・航空部隊は、苦戦を強いられていた。

蛸怪獣ガイロス。黒色の全身に黄色の吸盤は、かつてと変わらない姿だ。上空よりミサイルを撃ち込むも、頑丈なその体は、いとも簡単に跳ね返す。

さらに何者かが改造を施したらしく、目から白色光線を発射。一機を撃ち落としてしまふ。

パイロットは間一髪、パラシュートにて脱出。しかしガイロスがこちらに振り向き、今にも光線を発射する構え。彼は目を瞑り、最期を覚悟する。

次の瞬間——パイロットが目を開けると、ガイロスに赤い巨人が覆い被さっていた。

「あ、あ……あれは」

信じがたい光景に、思わず叫ぶ。

「ウルトラセブン!」

巨人が「デュワツ」と声を発した。

海原で、両者はしばし揉み合いになる。やがて距離が生じると、ガイロスはあの光線を発射した。しかしウルトラセブンは、両手を合わせ捕らえるようにして、光線を無効

化する。

そして、今度はヒーローが反撃する番だった。

光線を防ぐと、そのまま両手を頭部に添え、前方へ振り下ろす。ブーメランの形をした白色光が、ガイロス目掛けて飛ぶ。

これこそウルトラセブンの武器・アイスラッガーである。

哀れガイロスは、八本の腕を切り落とされ、ほぼ無力となった。背中を向けて逃げようとするも、ウルトラセブンは右腕を水平に構え、額のランプからビームを発射。彼のもう一つの必殺技・エメリウム光線。

爆発音とともに、水しぶきが上がる。そしてガイロスは崩れ落ちるように、ゆっくり海の底へと沈んでいった。

3. 違和感

海岸沿いの国道。ハヤタは公務用車を、西へと走らせていた。

その道中、再び流星バツチが鳴る。通信をオンにして「こちらハヤタ」と応答した。すると、さっきの男の声が聴こえてくる。

——ハヤタ長官へ報告です。先ほど東京湾沖に、ウルトラセブンと思われる赤い巨人

が現れ、怪獣を撃退しました。出撃した我が航空部隊は、一機が撃墜されたものの、パイロットは脱出。負傷者はいません。

「そうですか、皆さん無事で何よりです」

——長官は、このまま基地へ帰られますか？

「いや。すまないが、一つ用事を済ませてから戻ります。今回の事件のことで、どうしても調べたいことがあるのでね」

——では、護衛の者を寄越しますから、少しお待ちいただけますか。

「ハハハ。気持ちはありがたいが、まだまだ君らよりは動けるさ。ご心配なく」

——これは失礼致しました。しかし、あまりムチャはなさらぬようお願いします。

「ありがとうございます」

通信を切り、ハヤタは車をＵターンさせた。向かうはモロボシ・ダンが毎年訪れるという、あの霊園だ。

車を三十分程度走らせ、目的地へと辿り着く。

霊園を囲うようにして、ススキがみつしりと生えている。正午過ぎだというのに、どこか薄暗く寂しい雰囲気だ。

助手席に置いていたバインダーを手に取り、眼前に寄せる。そこには地図のコピーを挟んでおり、ハヤタ自身が×記を書き込んでいた。

ここが……例の怪電波が途絶えた地点だな。

車を降り、霊園の中へと入っていく。家々の墓が並び、いくつかはまだ新しい花が供えられている。まるで人の気配はない。

ところが……ものの五分程度、奥へ進んだ時だった。ハヤタの数メートル先に、肌寒ささえ感じる気候には似つかわしくない陽炎が、ふいに立ち込める。

やがてそこに、ぼんやりと人影が浮かぶ。

——フフ、そろそろ現れる頃だと思っていましたよ。

頭の中に、直接声が流れ込んでくる。テレパシーだと、ハヤタはすぐに気が付いた。やがて影が、くつきりとした人の姿となる。そこに立っていたのは、ジャケットにジーンズ姿の青年だった。普通の人間でないことは、明らかである。

——ハヤタ・シン。いや……ウルトラマン！

「まず聞こう。君は一体、誰だ？」

怯むことなく、ハヤタは尋ねた。

——我が種族の名は、ノンマルト。

「ノンマルトだと？ あの、地球の先住民だったという」

——いかにも。しかし……フフ。わざわざ尋ねなくとも、私のことはモロボシ・ダンから聞かされているのでしょうか。

「いいや。君のことは、まだ何も……そうか」

なるほど。モロボシさんはすでに、この青年と会っていたのか。だから彼にしては、やや冷静さを欠いていたのだな。

——まあ、いいでしょう。あなたにも伝えておきたい。

薄笑いを浮かべ、青年は言った。

——我々が進めている海底都市建設を、今度こそ邪魔しないでもらいたい。

「すまないが、私個人に言われても困る。そういうことは堂々と姿を現して、世界の首脳が集まる国際会議にでも出向き、直接交渉したらどうかね？」

——もちろん、いずれそうするつもりです。だがその前に、あなた方は傍観者に徹すると約束してもらいたい。でないと、我々の計画は台無しになる。

「そもそも、本当に海底都市かどうか怪しいものだ」

——ウルトラマン。あなたも結局、地球人に一方的に肩入れするのですか。

「低次元な言いがかりはやめたまえ」

ハヤタは厳しく言った。

「あの事件。公平に見れば、たしかに地球人はやり過ぎたかもしれない。君達の『海底都市』だという主張を信じるのなら。我々はその時、ノンマルトの罪なき住民の命を奪ったことになる。気の毒なことをしたと、私も思っている」

だが……と、さらに話を続ける。

「一方で、君達にも大いに落ち度がある。地球人と交渉しようともせず、一方的に警告を伝えただけで、すぐさま攻撃を仕掛けたことだ」

——我が祖先を滅ぼした地球人と、交渉などする余地はない。

「そこだ。交渉のテーブルに着こうともせず、君達は一足跳びに実力行使へと打って出た。立派な侵略行為だろう。これでは地上破壊の前線基地を建設しているのではないかと、誤解されても仕方あるまい」

青年は、険しい顔つきになる。初めて感情を露わにした。

「……今回だって、私とモロボシさんに手出しを控えて欲しいと言いながら、自分達は怪獣を操り攻撃してきた。これでどうやって、君達を信じろと？」

そう言うのと、相手は意外な反応を見せた。

——な、なんだって？ ウソだ。私は、そんな命令など……

妙だな、とハヤタはすぐに察した。

どうもこの青年は、グループ内部の者と、上手く意思疎通が図れていないようだ。彼らは必ずしも、一枚岩ではないらしいぞ。それに、例の怪電波の正体も気になる。

「もう一つ聞かせてくれ」

やや声のトーンを落とし、ハヤタは質問した。

「君達ノンマルトは……この地球から、離れたことはないのだな？」

——あ、当たり前じゃないか！

青年が声を荒げる。その返答だけで、ハヤタは事件の大まかな構図をイメージできた。

「君に忠告しておこう」

なおも厳しい口調で告げる。

「偏見や復讐心に囚われれば、冷静な判断力を失う。それは地球でも他の星でも同じことだ。またそういう者は……悪意を持った別の存在に、利用されがちだ。ゆめゆめ、このことを忘れないでもらいたい」

——どういう意味だつ。オイ、待てよ……

呆然とする青年を一人残し、ハヤタは踵を返した。

※後編へ続く。

ノンマルトの伝言〈後編〉

1. 明かされた真相

翌日の午後。二人は、都内某所にあるカラオケボックスの一室で落ち合った。部屋は防音壁で作られており、密談するには最適だ。

「焚きつけている者がいる、ですって？」

ダンが、驚愕の声を発した。

「ええ。あの青年は、ガイロスを操ったのではないそうです。どうやら別の誰かと協同していたのが……経緯からして、段々と主導権を奪われつつあるようだ」

そう言つて、ハヤタはウーロン茶を一口飲み下す。

「誰かというのには、彼らの種族内における、もつと上の存在ということですか？」

「そうかもしれません。ただ私が気になっているのは、先にキャッチした宇宙からの侵入者の情報です」

「ああ、例の……彼が伝えてきた」

ダンの相槌に、ハヤタはうなずく。

「ソイツがああ青年を唆して、隠密に動き回っているとしたら……ちよつと面倒です」
その時、ふいに部屋のドアがノックされた。

「あ……僕が、出ましょう」

ドアを開けると、そこには二十歳前後の若い女性、そして父親らしき五十歳前後の男性の二人が立っていた。ダンとはつきり、部屋を間違えたものと思った。

「おや。待ち合わせの部屋が、探せないのですかな？」

ところが女性は、間髪入れずにこう答えた。

「モロボシ・ダンさん。それに後ろの方は、ハヤタ・シンさんですね？」

驚いて、ハヤタと目を見合わせる。このカラオケボックスにいることは、誰にも伝えていない。それに二人とも、偽名を使って部屋を利用していたのだ。

「……そうだが、あなた方は？」

「屋敷にて、我が一族の長が待つております。是非とも、お二人に話したいことがあると」

何やら有無を言わせない雰囲気だ。

親子(?)に言われるまま、二人はカラオケボックスを出た。すると店先には、黒の高級リムジンが横付けされている。

「これは随分、用意がいいのですね」

ダンの冗談めかした一言に、親子はニコリともしない。ハヤタが苦笑いして肩を竦める。

それからリムジンで三十分ほど走り、やがて郊外へと出た。さらに十分ほど過ぎると、まるで武家屋敷のような建物が見えてくる。

ほどなく車はスピードを緩め、建物の裏手に停まった。

「(こ)ちらで(い)きます」

女性の声と同時に、扉が開けられる。どこから現れたのか、使用人らしき複数の男女がそこに立っていた。二人がリムジンから降りると、なぜか丁重にお辞儀してくる。

屋敷に上がると、さっきの若い女性に先導され、廊下の奥まで案内される。その突き当たりに襖があった。

女性は正座して襖を開け、二人を「どうぞ中へ」と促す。

そこは広さ四畳半程度の、座敷になっていた。障子張り、さらには壁の掛け軸。一般的な和室の造りだ。

「不躰にお呼び立てして、かたじけない」

声と呼ばれ、二人は前方を見やる。紺の作務衣を身に纏った老人が、座布団の上で胡坐をかいていた。すでに九十歳を超えていそうな風貌だ……もし彼が、人間であれば。

「……………ふむ、さすがに慧眼ですなあ」

見かけよりも張りのある声が発せられる。

「二人とも、ワシらが人間でないとすぐ見抜いたようだ」

「ええ、とつくに」

ハヤタは険しい眼差しで言った。

「どういうつもりで我々を呼びつけたのか、まず教えてくれませんか」

その時、ふと視線を感じた。ちらつと背後を振り向き、二人はぎよつとする。いつの間にか、異形の者達が十人余り集合していた。ごつごつした青い顔面に、黒一色の全身。きつと一族の長を警護するつもりなのだろう。

驚くハヤタに、ダンが耳打ちする。

「彼ら……ノンマルトです」

老人は「ハハハ」と高笑いした。

「そう身構えることは、ありませんよ。あなた方に危害を加えるつもりは、一切ないのですから。ささ、どうぞ楽になさい」

言われるがまま、二人も胡坐をかく格好になる。

「それで、あなた方は一体？」

「我らは……ノンマルト一族。その生き残りの者達だ」

やはり、とダンは胸の内につぶやく。

「素性が分かったところで、もう一つお尋ねしたい」

なおも厳しい口調で、ハヤタは言った。

「東京湾沖にて怪獣を出現させたのは、あなたなのか？」

「……ううむ」

ふと渋い顔になり、老人は答える。

「結論から言えば、違います。しかし……どうやら、幾つか誤解を解かなければいようですな」

そして、今度はダンに顔を向けた。

「モロボシさん。我々の種族のこと、あなたはどのように聞いておられます？」

「はい。ノンマルトというのは、M78星雲では地球を指します。つまりあなた方の種族は、地球の先住民だったと」

横から「しかし」と、ハヤタが補足する。

「その説に関しては、この星における生命の進化の過程からして、かなり矛盾していると指摘せざるを得ませんが」

老人は、小さく溜息をついた。

「ふむ。やはり肝心な部分が、事実と食い違っておる。モロボシさんの知っている説については、半分正解で半分間違い、といったところかな」

「そ、それは……どういう」

思わずダンは腰を浮かせる。

「ダンさん、ハヤタさん。こう言えば、きつと理解してもらえるだろう。我々は……あなた方と同じく、もともと宇宙から来たのだと」

衝撃的な事実にも、二人は言葉を失う。

「少し詳しく話そう」

あとは淡々と、老人は説明を続けた。

「つまり我々の祖先は、人類誕生以前の地球に住んでいたのですよ。もちろん侵略などではなく、惑星調査の一環でね。その時、彼らはこの星を“ノンマルト”と名付けた」

「そ、そうかつ」

つい声を上げてしまう。

「だから私達の星にも、ノンマルトという名前が伝わっているのか」

「さすがモロボシさん、ご名答」

相手は満足そうに笑う。

「しかし、一つ分からないのですが」

ハヤタがまた質問を投げかける。

「調査目的で来たのに、なぜそんなに長期間、居住することになったのです？」

「そこなのですよ」

老人は腕組みして、渋い顔になる。

「故郷の星で、醜い争いが頻発しましてね。帰るに帰れなくなってしまうたのです。仕方なく、この星に永住することにしたのですが……間の悪いことに、ちょうど地球にも高度な知的生命体、すなわち人類が誕生したのです」

溜息混じりの声になる。

「こうなると、我々が手を振って地上で暮らすわけにもいかなくなる。そこで海底に移り住もうという話になったのですが……中には、この星の生命を根絶やしにすればいい、などと過激なことを言うヤカラもいましたね」

「それで、争いになった……と？」

ダンの問いに、老人は小さくうなずいた。

「なんのことはない。単なる、みつともない内輪もめです。それでも、どうにか過激派を追放して、以後は海底で暮らすことになったのですが」

そして、また溜息をつく。

「人類の進化は、想像以上でした。気づけば海底にまで進出して、我々の生活圏を脅かすまでになったのです。そこで……またぞろ消えたはずの過激派が台頭して、原子力潜水艦を奪い、さらに怪獣まで操って、地上攻撃を仕掛けるに至ったというわけです」

なるほど、とダンは相槌を打つ。

「結果は……今さら語るまでもありませんな。モロボシさん、あなたの所属していたウルトラ警備隊の反撃に遭い、都市ごと破壊されてしまった。ワシは穩健派のメンバーを率いて、先に脱出していたが、残った者は死に絶えたはずです」

無念そうに、老人は目元を押さえた。

「ただ、ワシらが言えた筋合いではないが……ウルトラ警備隊も、少々やり過ぎましたなあ。都市が破壊し尽くしたことが、大きな禍根を残した。穩健派メンバーの中にも、人類に対して恨みを持つ者が出てきてしまった。それが今日まで続いているのですよ」
そう言つて、さらに付け加える。

「あの若いのは、その筆頭格だね。どこで聞きかじったのか知らないが、突然『この星を人間から取り返してやる』などと言い出して、ワシらも困っているのですよ」

心底うんざりした顔で、老人はやれやれと肩を竦める。

「今お伝えした通り、本当はもつと複雑な事情があるのだが……若者は分かりやすい話を好みますからな」

ダンはしばし瞑目し、一つ吐息をつく。

何だか、とても疲れた気がした。それでも、これが紛れもなく「ノンマルト事件の真相」だな……と、確かに腹落ちする。

2. 黒幕の正体

二人が屋敷を出ると、あの青年が立っていた。

「なぜここにいるのです？」

初めて彼の肉声を聴いた。

屋敷の中から、青年の仲間が出てこようとするのを、ダンは制した。そして相手の問いかけに答える。

「真相を確かめるためだ」

束の間、青年は黙り込む。

「やはり君は、いくつもカン違いしている。それに君の仲間は、地球を奪い返すことなんて望んじやいない。目を覚ますんだ」

「う、ウソだっ」

相手は激高した。

「アンタ達が、人間にとって都合のいい話を吹き込んだに決まってる。そんなの信じるものか！」

もはや当初の不敵な笑みは、欠片も残っていない。

「きみいつ。いい加減に……」

その時、ふいにハヤタが割って入る。

「君が何を信じようと、信じまいと、それは君の勝手だ。しかし……君のバックにいる、明確な悪意を持った何者かは、決して見逃すわけにはいかない」

いつになく険しい眼差しを向けた。

「これだけは答えてもらおう。君のバックにいるのは、一体誰なんだ！」

さすがに動揺したらしく、青年は目を大きく見開いた。

「……そ、それは」

やがて口を開き、何かを言いかける。その時だった。

三人が向かい合う路上に、どこかから小さな手榴弾のようなものが投げつけられた。伏せろっ、とダンが叫ぶ。

ドンッ！ 破裂音がして、爆風が飛び散る。咄嗟に姿勢を低くしたため、ダンとハヤタはかすり傷で済んだ。しかし青年は遅れてしまい、頭を負傷してしまう。

ハヤタが顔を上げた時、黒い人影が走り去っていった。

「手当てを頼みます！」

ダンの一声に、待機していた数人が駆け寄ってきた。そして青年を抱き抱える。幸い

にも意識はあるようで、小さく「裏切りやがった……」とつぶやく。

黒幕は、今のやつだろう。きつと口封じに来てたんだ。

その時ふいに、流星バツジが鳴る。通信をオンにして「こちらハヤタ」と応答した。すると、悲鳴のような声が返ってくる。

——ハヤタ長官、大変です。東京湾に巨大なロボットが出現。停泊する大型船を、次々に襲っています。

「そのロボットの特徴は？」

——はつ。体長は六十メートル前後。頭部と胸の方に、電光板が装着されています。また歩く度に、ワツシワツシと不気味な音がします。

傍らで、ダンが大声を発した。

「キングジョーだ！」

ハヤタは青年に駆け寄り、囁くように尋ねる。

「そのキングジョーというロボットも、君が操っているのかね？」

「……ち、違います。あれは……アイツが」

そこまで言うのと、青年は意識を失う。

仲間が慌てるのを、ハヤタは「大丈夫、ただの貧血でしょう」と落ち着かせた。そしてダンに顔を向けた。

「モロボシさん……いや、ウルトラセブン。すぐ現場に急行してください。ここはロボットの特徴を知っているあなたじゃないと。防衛軍の装備では、おそらく敵しい」
「分かりました。ハヤタさんは、どうされるのですか？」
「私の方は、さっきのやつを追います」

口には出さないが、ハヤタはさっきの人物の気配に、既視感があった。心の隙に付け込むような狡猾さ。自分はなかなか姿を見せず、配下を操ろうとする。

「……黒幕をつかまえたら、私もすぐ急行します」

「ええ。それでは、健闘を祈りますよ」

それだけ言葉を交わし、二人はお互いの目的地へと向かった。

東京湾に突如出現した巨大ロボット。周辺は、大パニックに陥っていた。

数隻の船が転覆し、オイルに引火して炎上している。サイレンが鳴り響き、多くの人々が悲鳴を上げながら、四方八方へ逃げていく。

炎の海の中を、ロボット怪獣キンググジョーが悠然と動き回る。

すでに防衛軍の航空部隊が、ミサイル攻撃を始めていた。しかし鋼鉄に覆われたキンググジョーの体は、それをまるでモノともせず。

しかし……その背中に飛び掛かったのは、ウルトラセブンだった。

路地を駆け抜け、ハヤタは大通りに出た。そして西側へ振り向く。

そこから数十メートル前方の坂の上に、やはり黒い人影があった。その姿が、すぐにはつきりと浮かび上がってくる。

漆黒のスーツ、さらに帽子も黒のシルクハット。

——どうやら今回も、失敗したようだ。

テレパシーだ。初老の男性の声が、頭の中に流れ込んでくる。しかも、やはり聞き覚えのある声だった。

「な、なにいつ」

——人間ではない、地球の先住民の心なら、うまく利用できると思ったが。そう甘くはなかった。しかし……君との約束が果たせて、良かったよ。

「約束だど？　なんだ、それは！」

——君の若かりし頃、こう言ったのを覚えているかね？　私はもう一度……人間の心に挑戦しにやってくる。必ずくるぞ、とね。

人間の心に挑戦する、だとつ。やはりそうか、あいつの正体は……

眼前を、ふいに砂煙が舞う。ハヤタは咄嗟に、姿勢を低くした。そして再び見上げると、小さな円盤が回転しながら、少しずつ上昇していく。

逃がすものか！

ジャケットの内ポケットに手を入れ、ハヤタはベータカプセルを取り出す。そして右手で頭上に掲げ、ボタンを押した。

その刹那。まばゆいばかりのフラッシュが、彼の全身を包む。

——シユワツチ！

大空に、銀色の巨人が現れる。そして加速した円盤を、超高速で追い掛け始めた。彼こそ我らのヒーロー・ウルトラマンである。

しばし円盤を追い続けた後、山の麓付近に差しかかった。そこで両手をT字の形に組む。そして白色の連続技・フラッシュ光線を発射した。数発命中する。

円盤は揺れながら落下し、爆発炎上した。そして、やはり巨人が出現する。その姿を確認し、ウルトラマンも地上に降り立った。

黒の全身。小さな青の双眼、発光する黄色の口。狡猾さで、全宇宙にその名を知らしめた悪質宇宙人・メフィラス星人である。

束の間、両者はにらみ合いを続けた。

そしておもむろに、メフィラス星人が右拳を突き出す。そして光線を打ってきた。ウルトラマンはすばやく右腕を耳の後ろに引いて、八つ裂き光輪を放ち応戦する。

二つの光は、両者のほぼ真ん中で衝突し、弾け飛んだ。

——フフ、これぐらいにしておこう。

——までもテレパシー。相手が、不敵に笑ったように見える。

——昔も言ったが、宇宙人同士で戦ってもしようがない。今回は、ノンマルトの若者の心につけ込みたかったが、思うようにはいかないものだ。しかし……私はけつして諦めない。今度こそ、地球人の心を屈服させて見せる。フハハハハ！

高笑いの後。メファイラス星人の姿は、まるで空間から剥がれるように消え去った。

東京湾。ウルトラセブンはかつてと同様、キングジョーに苦戦を強いられていた。のしかかろうとしてきた相手を、どうにか振り払う。そして距離を取り、アイスラッグを放つ。しかし、これを簡単に弾き返される。

それでも怯むことなく、右腕を水平にしてエメリウム光線を発射。ところが、これもまったく通じない。やがて、ウルトラセブンの額のランプが点滅し始める。

まさに、その時だった。

東の空の一角が、きらりと光る。そして飛行する銀色の巨人が、海へ急降下してきた。避難する作業員の男が、ふと振り返り、こう叫ぶ。

「おおつ、ウルトラマンだ！」

キングジョーは、ゆっくりと陸地へ進み始めていた。その頭部に、ウルトラマンが上

空から、両足でキツクを浴びせる。

さしものキングジョーも、大きく上半身をぐらつかせる。だが倒れることなく、すぐに体勢を直してしまふ。

ウルトラマンは突進し、肩から体当たりを喰らわせるが、逆に押し返される。あやうく倒れそうになるのを、背後からウルトラセブンが受け止めた。海での戦いは、足を取られ俊敏に動けない。

二人の巨人は、互いにうなずき合う。そして一旦引き、十数メートルほど距離を取る。ふいにキングジョーが、頭部からピンポン玉の形をした、白色光線を連射してきた。ウルトラマンは咄嗟にフラッシュビームを打ち返し、敵の光線を無効化する。そして間髪入れず、八つ裂き光輪を放った。

だが、やはりキングジョーの頑丈な体には通じず。そしてウルトラマンの青かった胸のカラータイマーが、赤く点滅を始めた。

しかしこの時、ウルトラマンは一計を案じた。

ふいに左右の腕を×の形にし、両拳を握る。すると、怪力を誇るキングジョーの体が宙に浮き上がった。そして両腕を伸ばし、指先から二本の細い光線が放たれる。

これにより、相手の動きがストップ。かつて水爆を飲み込んだ、どくろ怪獣レッドキングを倒す際に用いた大技・ウルトラ反重力念力である。

そして二人の巨人は、互いに合図し合つてから、互いの必殺技の構えをした。ウルトラマンは両腕を十字に組む。一方、ウルトラセブンは右腕を立て、左腕は水平にした。左から、ウルトラマンのスペシウム光線。さらに右から、ウルトラセブンのワイドショットが同時に発射された。それが巨大ロボットに命中する。空中にて、キングジョーは爆発四散した。

3. 明けの明星が輝く空

翌日。防衛軍日本支部の手により、東京湾近辺の海底調査が行われた。

その結果、かつてノンマルトの海底基地のあつた地点に、小規模ながら数十個の建造物が発見されたのである。

すでに生命の気配はなく、そこはもぬけの殻であつた。

四十数年前の反省を踏まえ、今回は破壊せず。防衛軍の研究資料という名目で、丁重に保存されることとなつた。

また、生き残りのノンマルト達が潜伏していた屋敷は、いつの間にか跡形もなく消え去つていた。彼らがどこへ行つてしまったのか。その謎は解き明かされぬまま、事件は終わりを迎えたのである。

「やはり悪知恵の働くやつです。本当に、忌々しい」

苦々しげに、ハヤタは言った。

「建物が空っぽだったのは、すでに怪獣を出撃させた後だったからです。残りのものも、配下の宇宙人を隠れさせたり、武器を保管したりする地上呼応劇の前線基地として、利用する目的だったのでしょうか」

「では……あのノンマルトの青年は、メフィラス星人に唆されていたと？」

「そう考えて、間違いないと思います」

二人の戦士は、小さく溜息をつく。

午前五時。辺りはまだ、薄暗い。ダンとハヤタは、郊外のとある丘を訪れていた。東京湾にてキングジョーを葬ってから、三日が過ぎている。

「人間を言葉巧みに籠絡し、地球侵略の口実を得ようとするのは、やつの得意技です。以前も、私の同僚の弟、さとる君に近付き『地球をあなたにあげます』と、言わせようとした。その時はあえなく失敗に終わったが……」

ダンは「そうか」と合点した。

「今回は、地球人に恨みを抱くノンマルトの若者。純粋な正義感を持つ子供より、ずつつけ込みやすかったのでしょうか」

「ええ。おそらく『地球を君達の元に取り返そう』とでもうそぶき、海底都市再建だと偽って基地の建設を手伝わせていたのでしよう。ところが彼も、メフィラスの強硬な手段に付いていけなくなった。それでしまいには、離反に至ったと思われます」

「やつは今頃、自分の星でほぞを噛んでいるでしょうな」
「だといいいのですが」

ハヤタが苦笑いを浮かべる。

「メフィラスにとつては、いい娯楽だったかもしれない。人間とノンマルト。我こそは地球人だと主張する、両者の争いに、高みの見物を決め込んでね」

ふいに風が吹き始める。やわらかで涼しい、秋の風だ。

「やつを非難ばかりもしていられません」

地球の友は、やや険しい眼差しになる。

「これはノンマルトもそうだが、我々人類も、ろくに相手の話を聞こうとしなかった。だから互いに傷つけ合い、遺恨が残ったのです。そこをメフィラスにつけ込まれた。この点、我々は大いに反省しなければなりません」

そう言つて、ふと穏やかに微笑む。

「しかし、このように考えれば……モロボシさん。我々人類とウルトラマン達が、こうして長年に渡り良い関係を築けているのは、まさに一つの奇跡と言えるでしょうね」

「いいえ、奇跡などではありません」

ダンは、少しムキになって答えた。

「我々は、地球人のことを理解しようとして努力しましたし、地球人もまた我々を深く愛してくれました。ですからこれは、必然です」

「ハハ、これは失礼。やはり良い関係を築くコツは、互いを思いやる気持ちだと」

話を締めくくり、ハヤタは朗らかに笑った。ダンも一緒に笑う。二人の間を、鮮やかな紅葉が数枚流れていく。

「ところでハヤタさん」

最後に一つ、尋ねてみる。

「彼は今、どこに？」

「ああ。彼なら、もう」

愉快そうに、ハヤタは空を見上げる。

「また別の任務があるからと、キングジョーを破った直後、また旅立っていきましたよ。ペータカプセルも、いつの間にやらなくなっていました」

「そうですね……」

しばしの静寂。そして、ダンは右手を差し出した。

「では、ハヤタさん。お世話になりました」

「(ち)ち(ら)ち(そ)」

二人は固く握手を交わす。

「ご機嫌よう。モロボシさん……いやウルトラセブン」

ダンは微笑みを返し、ハヤタに背を向けた。そしてウルトラ・アイを取り出し、目元に装着する。

—— デュワッ！

ウルトラセブンに変身したダンは、東の空へと旅立つ。残されたハヤタは、ゆつくりと右手を振りつつ、違う星の戦友を見送った。

明け方近くになり、辺りは少しずつ白み始めている。ウルトラセブンの飛び去った東の空には、明けの明星がひとときわ輝いていた。

〈完〉